

TIME CAN'T WAIT

小田 和正



TIME CAN'T WAIT

小田 和正

朝日新聞社

90072896

小田和正 おだ・かずまさ

1947年、横浜市に生まれる。東北大学、早稲田大学大学院で建築学を専攻。在学中の1969年にオフコースを結成し、音楽活動を開始する。1989年2月26日に東京ドームでファイナルコンサートを実施し、5万人を超えるファンの見守るなか、オフコースとしての活動に終止符をうった。現在はソロとして活躍中。

TIME CAN'T WAIT

1990年12月25日 第1刷発行

1991年8月20日 第6刷発行

著者	小田和正
発行者	木下秀男
印刷所	凸版印刷
製本所	凸版印刷
発行所	朝日新聞社

〒104-11 東京都中央区築地5-3-2

電話 03-3545-0131 (代表)

編集・図書編集室 販売・出版販売部

振替 東京0-1730

©Kazumasa Oda 1990

ISBN4-02-256250-1

Printed in Japan

定価はカバーに表示してあります

日本音楽著作権協会(出)許諾第9060202-106号

はじめに

『TIME CAN'T WAIT』は十二回で終えた。当初、できれば二年くらい、ということだったけれど、締め切りに追われるのはレコーディングだけで十分だったので一年だけということにしてみました。一年なら、だましだましなんとか乗り切れると思ったから。そして見事に乗り切った。ところがこれを本にしようという話が持ち上がった。困った。本にするには短過ぎる。しかも、もうアレは自分の中では十二回で完結している。それで以前に書いたものを付録でつけちゃえということになった。『ということになった』

といっても会議をして決定したわけではない。自分で決めたのだ。オフコースのファンクラブの会報に書いていたものや、他の雑誌に頼まれて書いたもの。読み返してみると、同じテーマで書いているものが幾つもあって自分でもアキレタ。いつまでも同じところに居る。しかしまあ、『貫いている』と言えないことも無いと、自分にいいかけながら、こんな面倒臭がり屋が、とにかく一冊の本にたどり着けたのだからと素直に喜んだ。続編は絶対無い……と思う。めでなし、めでなし。

一九九〇年十一月

小田 和正

TIME CAN'T WAIT

目 次

はじめに

I

台の上

タンバリン

THE SAME MOON

あなたの作品は？

僕の中国旅行

夏の終り

心のスクリーン

期待に胸はふくらまない

僕の欧州旅行

1

9

14

19

25

30

36

41

46

51

僕の選んだひとたち

誇り高く生きる

僕の挫折

II

「あのひとも行ってしまおう」

監督・脚本・音楽・主演 小田和正

カズちゃん

二月二日

キャンプ

保土ヶ谷球場

バイオリンは止めてしまったけれど

73 78 81 86 90 97 102

56 61 66

カバー題字 小田和正

装幀 峰岸伸好

写真提供 WWP (P 14、P 56)

東宝株式会社

(P 61・黒澤明監督『生きる』より)

I

台の上



「お前はね、台の上に乗ってする仕事をやるようになるらしいよ」。どこかの占いか何かで見てもらってきたオフクロが、僕に言った。随分昔のことで、高校の頃か、それとも大学に入った頃のことか憶えていない。「台の上って、なんの?」「なんかこう、人を前にして一段高くなったような感じって言ってた」。僕は建築家になるつもりだったので、『裁判官でことはないだろうし、もしかしたらちよつと外れて、先生か何かになるのかな……。まあ教壇も悪くないか。チップス先生もよかったし、いつも心に太陽を』のシドニー・ポアティエの感じもいいな。それと野球部の監督もやって』とか思っていたらもうちよつと外れて、ステージで歌をうたうようになっていた。

丹下健三氏が「もし、建築をやつていなかったら」と質問されて、「指揮者になりたかった」と答えていた。彼には分かっているのだ、指揮者になっていたら、今まで見たことのない自分や、また別の感動に必ず巡り合っていたことが。それに、どんなに難しそうに見える仕事だって、決して手の届かないはるか彼方にあるわけじゃない、すぐ隣り合わせに

なっていることも。「どうして詞や曲が書けるのですか?」、そう聞かれるたびに僕は「君にも出来るよ、ただ君が書いたことが無いだけなんだよ、ほんとうだよ」と、答えてきた。僕は誰かが「何か他のこともしたい」と思っているのが好きだ。すぐにでもやればいいのに、と思ってしまう。それが特に、大成したひとならもっと嬉しい。——この道ひとすじ——は誰かに任せて。

大リーガーでありながらフットボールの選手だったりすることが、日本ではなかなか成り立たない。学校では、あれもこれも経験させるというよりむしろ、出来るだけ早くなんでもいいからひとつを選択させて、あとは脇目もふらず走り続けてゆくことを教えようとする。人間にはいつだって他の可能性があるし、心はいつも揺れ動いているのに。ジャンボだってプロ野球の選手だった。倉本が本気でスキーをやったっていいじゃないか、たとえそれで勝てなくなったとしたって。そうだ岡本綾子だって昔はソフトボール……。どうもゴルフになるとついムキになってしまう。

この国ではとにかく、常軌を逸してしまうのが怖いのだ。親は特にそうだ。よしお君の通っている塾には絶対自分の子供も行かせなくてはいけない。そしてあのまさし君だけは

確實といわれているE校に、なんとしても入学させなければ私たち親子に明日はない。トレンデイの草分けだ。トレンデイ感覚はほとんど不安から始まる。

「遅れてしまう、取り残される」という強迫観念。トレンデイ・ママはその歪んだ優しさで、子供の可能性を日常的に摘み取ってゆく。ほんとうは親こそが可能性の宝庫である子供たちの心の振幅を寛容に受け止めてやるのだ。そしてほとんどの可能性を放棄した君は少なくとも、よしお君と同レベルの大学を卒業し、その仕事に就くことができた。なかの親孝行、トレンデイ・ママも御機嫌だ。しかし折に触れ君は、何か変だな、違うなと思う。時はどんどん流れてゆく。そうだ、何か変なのだ。君のやりたかったのはそれじやないかも知れない。たった一度きりの人生で。

「これじゃいかん」と心の中で叫んでいるひとがたくさんいるのを、僕は知っている。

先日、大学の同窓会があった(週刊朝日に「建築探偵」を連載している藤森照信氏は同級生で、彼も来ました)。それぞれに自分の持っている建設現場や家族構成などの近況報告があり、僕が「今のところ現場はひとつも持っていないません」などと言って受けているうちに、当時『コイツガイチバンデキル』と秘かに思っていた同級生の挨拶になった。会場は

一瞬、緊張に包まれた。皆、同じ気持ちだったのだろう。「どうしても自分の名前に責任を持たせて仕事をしたかったので、二十年勤めた会社を辞めて独立しました」。鳥肌が立ち、僕の全身は震えるようだった。

『誰かがなんとかしてくれる』なんてことは、期待してはいけないうつくづく思う。文化の傍観者、社会の傍観者、そしていつか自分の人生の傍観者になってしまう。自分の存在理由はなんだろう。日本の存在理由はなんだろう。

さて、諦めるか、それとも自分で動き出すのかどちらかだ。今まで心の中だけで叫んでいたひとたちこそ、そろそろこの国を「なんとかしなくてはいけないのでは」、と力んでこのシリーズを始めてしまおう。

タンバリン

